

ナゴヤをつなげる 30人 第3期 Day6 レポート

2022年1月25日、名古屋市スポーツ市民局地域振興課主催の「ナゴヤをつなげる 30人」第3期 Day6 が開催されました。

「ナゴヤをつなげる 30人」は、名古屋に関係する企業、NPO、大学、行政など、多様なセクターから集った有志が、組織やセクターの枠を越え、まるで学校の同級生や組織の同期生のようにフラットにつながりながら、名古屋をより良いまちにしていく取り組みです。集まったメンバーがつながりを深めながら、課題解決のための活動を約半年間かけて立案・実行していきます。今年度はより地域課題に密着するため、中村区と中川区にフォーカスして開催しました。

Day6 は、第3期を締め括る報告会として、半年間の対話から考え出されたプロジェクトを発表する場です。前回に引き続き、オンラインでの開催となりました。メンバーの職場の上司や同僚の方々、Day4 のオープンセッションに参加してくださった人、名古屋市の職員など、関係者が見守るなか、4つのチームがそれぞれの想いとファーストアクションを発表しました。発表に対しては、中部電力株式会社の浦野隆好さん、名古屋産業大学准教授の今永典秀さんの2名のゲストからコメントと、最後に中村区・中川区の両区長から発表の感想をいただきました。発表の様子、ゲストの方々からのコメントなどをレポートします。

なかなかツアーズ

名古屋や、地元中村区・中川区の良さはたくさんあるのに、地元に住む自分たちがなかなかその魅力を自分の言葉で語れない、そのような現状がなんとかしたいというところから発足したチーム「なかなかツアーズ」。地元地域のディープな魅力をもっと発信して、知ってもらうためのプロジェクト企画を進めてきました。



そんな「なかなかツアーズ」から、中川区の中川運河にフォーカスを絞り、地元の魅力を自分の言葉で語れるようになるための種づくりのため、ものづくりや中川運河など、魅力的なコンテンツが複数存在している中川区で、映像プロモーションの作成をする発信チーム、中川区を語る場をつくるお話会チーム、ものづくり体験を実施する体験チームの3部門に分かれて、既存コンテンツをつなげる取り組みをしていきたいと報告がありました。ドローンを使ったPR動画の作成や、例えば「食」を起点として中川の人々が語り合える場づくり、地元のものづくり企業でのものづくり体験など、参加メンバーのリソースを生かした事業が語られ、とても可能性の広がる発表でした。

<ゲストの主なコメント>

今永さん チームメンバーが楽しく取り組んでいる姿を見せることで、新しく参加する人も入りやすくなるのではないかと。外部の方に取り上げてもらって発信してもらうような活動になったり、また1人の強烈なファンをつくるような活動になったりすると、とても発展性があると思いました。

浦野さん 11人でチーム一丸となって企画をまとめられていて良かった。チラシも本格的なものできていて、面白いと思います。少しずつスタートしていく中で、今現在みなさんが中川区のポテンシャルに気づいていると思うので、自分たちがすごく楽しんでいる段階じゃないかな。ぜひその楽しさを広く発信していただけるような形になってほしいです。

ナゴローバル

多文化理解をテーマに、普段から外国人の方と関わる仕事をしているメンバーや、多様な世代と関わる機会の多いメンバーで結成されたチーム「ナゴローバル」。価値観の違いから生まれるコミュニケーション不足やミスコミュニケーションから生まれるストレスをなんとかしたい、外国人や高齢者に関わる地域課題をコミュニケーションによって解決したいという思いから、プロジェクト企画を進めてきました。

報告会ではチームのビジョンとして、「多様な価値観への理解促進、そこから生まれる化学反応で、中村区中川区をもっと住みやすい町にしていきたい」、そのために自分とは違う価値観に触れる場を提供することで、ミスコミュニケーションを減らして、「理解できない」ストレスの軽減にアプローチすることを掲げました。具体的な事業案としては、①自分がモヤッと感じたことをシェアできるリアル掲示板、②自分の感情や疑問を意見交換できるシェアスペース、③シェアスペースでの共生イベント企画。まずは①の掲示板の試験導入を名古屋国際センターから始める予定です。

取組むテーマと、その背景



外国人の方が多く住む 中村区、中川区

いろいろな立場の人が住む地域。
「みんな」が十分住みやすいと感じられているだろうか？
街のコミュニケーション活性化には昔からの地元住民？最近住み始めた外国人？

価値観はどんどん 多様な時代に

国籍だけでなく性別、年代も様々。
SNSなど自分の考えを発信する場も増え、学校や職場、近所などで日本人同士でも「あれ？ちょっとこの人理解できないな」と思うことも。

価値観のちがう人同士 の関係構築を促進

いろいろな価値観があっても良い。
でも同じ価値観の人だけで群れていてはもったいない！
立場のちがう人たちが共生していくための取組みを。



<ゲストの主なコメント>

浦野さん 日本人の中でも、世代の違いも含めて、昔と比べて価値観は多様化してきていると思います。コミュニケーションは人と人との間の基本ですので、これからも地道に続けていただき、ここから色んな学びとか超えられるもの、広がりが出てくるはずなのでぜひ実行して欲しいと思いました。

今永さん 社会課題として重要なテーマ、多文化共生はこれからも大事になってくるところだと思います。ただ人が集まってもコミュニケーションはなかなか生まれにくく、マッチングする仕組みやプログラムがあることで、集まった人たちのコミュニケーションが円滑になっていく。レポートにつながっていくと思いますので、みなさんの知見や、持っているリソースを生かして、具体的に実装してほしい。

ファーストアクション宣言

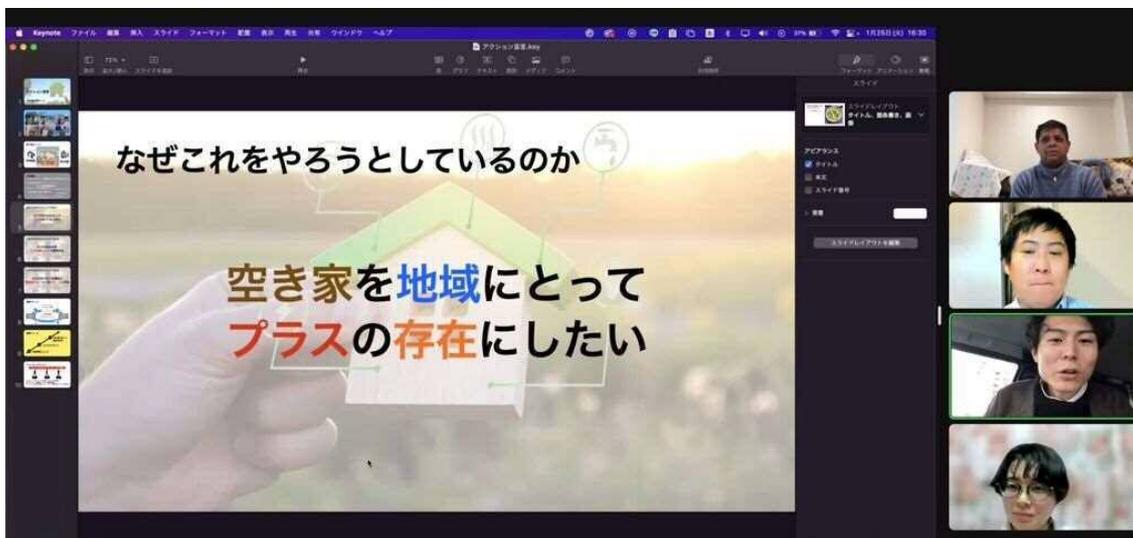
事業フェーズ① **2022年2月中旬に**
NICからスタートします！



映画ドラえもん ニーラの駄菓子屋研究所

空き家を活用して何かをしたいという思いで集まったチーム「映画ドラえもん ニーラの駄菓子屋研究所」。チームにいるメンバーのキャラクターを生かしたチーム名です。空き家を壊して、空き家を減らすのではなく、「空き家を地域にとってプラスの存在にしたい」ということをテーマに、人と人がつながる場所や子どもの居場所づくりとしての空き家活用を考えてきました。特に子どもたちと一緒に空き家の問題を考えることや、子どもに空き家を使わせることで生まれる可能性などを模索してきました。

これからの取り組みとしては、空き家を活用して実現できることや空き家の可能性を周知して、空き家を使って何かしたいと思った「潜在プレーヤー」を発掘・支援していくことを発表しました。ファーストアクションとして、空き家を使って何がしたいのか、何かしたことがあるかを話し合うアイデアソンを実施し、そこで出たおもしろいアイデアを実行に移せるよう、空き家を使いたい人と空き家の持ち主とのマッチングを図るプラットフォームを活用していきます。



<ゲストの主なコメント>

今永さん 中村区や中川区は、名古屋駅からの物理的な距離は遠くないけれど、商店街があったり、古民家があったり、とても特殊なエリアなので、それを生かして、その地域に住んでみたいと思うようなコンテンツが、アイデアソンで生まれてくると良い。ただそこで住むだけじゃなくて、例えば大学生のサークルができたり、子供が集まったり、ママさんコミュニティみたいなものができたりしながら、色んなところが

共創していくと非常に面白いだろうなと思いました。

浦野さん 子どものために空き家を使って空き家の価値を向上させるというところで、個人的には空き家を子どもに使ってもらう具体的な例が出てくるのかと思って聞いていましたが、逆に子供を巻き込んだアイデアソンを行うという、大きな広がりにつながるような形で出てきたのは意表を突かれました。ぜひそのイベントを実現して欲しい。アイデアソンという形であれば、中村区・中川区に限らず、さらに大きな展開ができると思う。

ファーストアクション
カジュアルなアイデアソンの実施

子ども 学生 社会人

- ①このファーストアクションで面白いアイデアを発掘する
- ②アイデアソンで集めるターゲットの属性を絞る
- ③アイデアの周知or実装などアイデアソン開催後のアクションを見定める

FCC

「地域課題×コンビニ」ということで、孤立する子育てやヤングケアラーなどの課題を、地域のインフラであるコンビニエンスストアを地域コミュニティの場所として機能させることで、解決できないかというテーマでプロジェクト企画を進めてきたチーム「FCC(ファミリーコンビニエンスコミュニティ)」。

今回、企画を具現化するために、実際にコンビニ店舗にお話を伺い、2階が広いイートインスペースになっていて、そこの活用方法を模索している店舗にご協力をいただけそうです。発表はそのコンビニ店舗さんのイートインスペースからの中継でした。

報告会ではファーストアクションとして、まずはチームメンバーが担い手となって、ご協力いただける店舗で実際に、子どもや子育て中の親の支援につながるようなイベントを実施していき、イベント参加者だけでなく、コンビニ利用者には寄付のような形で関わりを持ってもらえるようにしていくこと。実施していく中で、その利用客の方々や賛同いただける地域の企業団体など、少しずつ担い手を増やしていき、最終的にはコンビニを地域のハブとして浸透・定着させていきたいと発表がありました。

地域課題 × コンビニ

地域課題 = 孤立する子育て、ヤングケアラー

コンビニ = 買い物の場としての地域インフラ

(仮説)

→ コンビニが買い物だけのインフラではなく、
地域コミュニティの場としても機能しないか？



<ゲストの主なコメント>

浦野さん 実際にはコンビニにヒアリングに行き、抱える課題やニーズとマッチする形で、活用方法を見つけたところが本当に素晴らしいなと思いました。次はイベントに参加する人のニーズや興味、課題を掘り下げていく必要が出てくる。やはりコンビニは地域にたくさんある拠点なので、派手ではなくても、小さな灯火のように広がっていけば、地域が温かいものになると思いますし、地域のハブとして定着するためには続けることが大事だと思います。

今永さん コンビニは商圏エリアが限定的という特徴があるので、その中のファーストチョイスになるコンビニを目指すと非常に先進的なモデルになると思います。また普段接しない人たちとコンビニを通じて接するという体験も学びになると思うので、そこでウィンウィンなものをつくっていけると色んな人が集まってくるような仕組みができるのかな。

このように4つのチームそれぞれから、個性的で今後がとても楽しみな発表がなされました。発表後には、中村区長、中川区長から、発表についての感想と激励の言葉をいただきました。

中村区長 外国人青年と地域の高齢者、ふと思ったことを共有する掲示板・場所など、空き家の活用を含めて、人と人がつながる場所というアイデアが出てきた。非常にコミュニケーションの大切さが求められていると思いました。この30人もつながっていくところが非常に大事だと思いますので、ぜひこれからも仲間としてつながっていただければと思います。

中川区長 地元の人たちが中川区に愛着を持って地元の魅力を語るようになることや、今の時代に合った、人々が集う拠点をどのように構築していくことなどは区役所でも議論しているところです。どの事業も継続して進めていく中で様々な人々を巻き込んで、さらに発展していくことを期待しています。

ナゴヤをつなげる30人ひとまず半年間の活動に区切りがつけられます。けれどこれで終わりではなく、ここからが各チームのプロジェクトがスタートします。どれも地域課題の解決や、コミュニティ・居場所づくりなどこれからの地域にとって重要なものばかりです。これからの動きもチェックしていただきながら、ぜひ応援してください。

